

「ヨハネによる福音書」を読む（第9回）

ヨハネ福音書 第16、17章

2010年3月7日（東京 新宿）

● 一体一如の関係

今日は、ヨハネ伝14章からお別れの言葉が始まっておりますから、少し前の所から復習も兼ねて見ておこうと思います。全部ではありませんが、ヨハネの14章の15節から見たいと思います。

「¹⁵「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。¹⁶わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。¹⁷この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。¹⁸わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。¹⁹しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。²⁰かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる。²¹わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」

少し飛ばして、

わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む。²⁴わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。

この二つの箇所、助け主、聖霊を遣わすというところと、それから今度は、我々の中に住んでくださる。

私は父の中に居り、あなたがたが私の中に居り、私があなたがたたちの中に居ることをその日にあなたがたは悟るであろう。私の掟を認め、それを守る人は私を愛する者である。私を愛する人は私の父に愛されるだろう。私もその人



を愛し、その人に私自身を現そう。」（ヨハネ14・15～24）
と。お別れに当たって、本当にこの愛を、愛だけを語ってください。それも父が御子キリスト・イエスを愛してくださった。

「その全く同質の愛で私はあなた方を愛してきた。あなた方も互いに愛し合うように」
と。「あなた方も愛し合うように」というのが掟なんです。他の道徳的掟は何一つ語られていません。

「互いに愛し合いなさい。私があなた方愛したようにあなた方も愛し合いなさい」

と。それが完うされているなら、その中に私はいるから。私が居るということは父も一緒にいる。だから、父・御子そして私たち。それを包んでくださる聖霊。この四者一体、これが成就する。この約束がずうつとこれからも読んでいきます14章、15章、16章の所なんです。これは全く愛の章なんですね。これは「わかる、わからない、論理的にどうだ」とか、そういうものではありません。ちょうど、皆さん、音楽を聞かれますね。その時に、音楽をいちいち論理的に考えられますでしょうか。ハートに迫ってくる、からだの中にしみ込んでくる。それが繰り返してきます。これから読んでいきます所も繰り返してあるんです。論理的な論文なら「なんでこんな繰り返しがあるのか、無駄ではないか」となります。そうではない。私たちのハートにしみ込んでくる。繰り返し繰り返しそれが音楽として奏でられてくる。それは愛の調べなんですね。その愛の質たるや、この世的な我々がもっている愛とは遙かに違う高次の愛なんです。

「父が私たちを愛されたように、私もあなた方を愛した」

と。父がイエスをどのように愛されたかということは、私たちは想像はできません、本当は知らない。でも、イエスさまは知っておられる。

「たとえば皆が自分を棄て去っても、私は父と一緒にいるから寂しくない」

とあとで言います。弟子たちは棄てて行くんですけれども。

「私は常に父と一緒にいる。常に父の御意を行っているから、父は決して私をお棄てにならない」

と。もう羨ましいほどの一体、一如の関係が成り立っています。

「そのような関係の中にあなた方を引き入れたい、抱き締めたい、いつもその中に護りたい」

という、この上からの愛がひしひしと迫ってくるのがこのヨハネ福音書なんです。

「自分の側がどうであるか、自分がそれに相応しいか」

とか、そんなことは一切問題になってない。愛という関わり、愛という事態は、そんな「こちら側がどういう人間であるか」とか、そういうことはなしに貫いてくるんです、上から



太陽の光のように。太陽の光がずうつと浸透してきますように、キリストの愛、愛の生命が我々の中に浸透してくる。

「その中にずうつと留まっていなさいね」

と。しかも、それはお別れの言葉なんですね。お別れに際しては一番大事なことを語るはずです。そのお別れに際して語られた言葉がずうつとここに展開されていますので、これは私たちの側から言えば、それを「はいっ、その通りです」と受けとる。何回も何回も私たちはそれを読んで味わって、「ありがとうございます」と。ラブレターなんです。別れ際に我々に下さったラブレターです。それに対して皆さんは仰るかもしれない。

「奥田先生は何もその場所に居合わせたわけでないでしょ。十二使徒でも何でもないでしょ。なんで、そんなに言えるんですか？」

と。17章にイエスの祈りが出てくるんですけども、そこには弟子たちがいます。次にまた、弟子たちを通して聞いた信者たちがいる。それからまたその外にいる人たちもいる。今ここで語られているのは、イエスさまといつも一緒に暮らしていた、お話を聞いていたこの弟子たちです。私たちは外の外のもつと外なんです。当時のユダヤの世界での外、そのまだもつと外に我々はいたけれども、いつか厚かましくここへ来てしまったんですね、カリーングのストーンみたい。こすつてこすつてここへ来たんです。そしてそこにドーンと居すわっている。

「あつかましい話だね」

「いや、イエスさまはすごい愛のお方なんです」

と。ギリシヤ人だ、サマリア人だという、そんな区別は何もなさっていない。ハートを持った人間として我々を見てくださっている。だから、私たちが自称弟子と言うのをとても喜んでくださると思います。私たちは自称弟子ですよ、もう外の外に居たのがいつの間にかこの真中に居る。そういう気持ちでこれを読まなければ、読んだことになりません。時代を超え、所を超え、イエスさまの生命の世界というのはそういう世界ですよ。正にそういう世界です、永遠の質を持っている。そこへ飛び込んだ者が勝ちです。これを外から眺めて分析している人間はいつまでも蚊帳の外。しかし、「はいっ」と言つてここへ躍り込んで行けば、

「よく来たね、お前こそ真にわが弟子である」

と言つてくださる。皆さん、「直弟子だ」と言つて欲しいでしょ。

「お前はわが直弟子である。わが友である。もう僕とは呼ばない」

と。誰に対してもそう言つてくださる。だから、熱心に中へ飛び込んだ者が勝ちなんです。何も人と争う必要はありませんけれども。ここは実に豊かなところですからね。

「所を備えに行つて、場所の用意ができれば、また迎える」

と仰つてくださったように、ここは実に豊かな生命の世界ですから、そこに我々をお招き



くださっているのがこの14章からの所であって、これが単に当時の弟子だけに語られて、我々に無縁だったら、こんなものを読んだって何の値打ちもないわけです。そうじゃなくて、実はこういうヨハネのこの箇所を通して——いや他の所も同じですよ——遠い遠い所にいた人間もみなここへ来れるんだと、直弟子になれるんだということです。

「その人は、人の願いによらず、血脈によらず、神のみによって生まれる。人新たに生まれずば」

とありますね。我々は皆そのように、ここにいらつしやる方は、新たに生んでいただいた。自分で生まれたのではない。生んでくださったんです。肉なる形でこの世に生み出されながら、ある時イエスさまに出会って内的変化が起こって、この質をいただいた。そうすると、引き合うんです。同質のものは引き合う。イエスさまが神さまと引き合っておられたように、今度はイエスさまと私たちが引き合う関係になる。吸引力が凄いです。主の吸引力が凄いいから、私は見事に吸い寄せられた。本当に吸い寄せられました。皆さんもそうじゃありませんか。吸い寄せられて嬉しいでしょ。私を吸い寄せてくださった。一人ひとりを吸い寄せてくださった。そういうふう to 受けとってくださいね。

ですから、私はここで皆さんとお話しているのは、ちょうどタイトルが「ヨハネによる福音書を読む」という、先生と一緒に読んでいます。一緒に味わっているんです。私がおかをお教えるとか、そんなのでは全くありません。だから、本当にこの生命の世界を共有する。みなここに一つの生命が流れている、満ちている。聖霊さまが満ちていてくださっている。そういう空間なんです、ここは。聖なる空間なんです。この十字架が立っています。立っています十字架ですっかり我々は潔められている。昨日までどんな思いでいらつしやろうと、そんなことは関係ない。ここに入ったらそこで

「汝、既に潔し。わが語りたる言葉によりてなり」

と。我々の人間の側からする清めだとか、悔い改めとか、そんなものは相対的なものです。キリストさまがこの十字架で背負ってください。あの「ベンハー」の映画のように、消えない憎しみ、どんなに取り去ろうと思っても取り去れない憎しみ、それが知らないまに消えていた。自分の心がすがすがしくなった。生まれて初めてだと、彼は告白する。婚約者が言うんです、「あなたの目から憎しみが消えています」と。それまでは憎しみの炎が燃えていた。そんなふうに人を変えてくださるのがこの十字架。そして十字架を通して流れてくる聖霊さまで。その聖霊の世界がヨハネの14章からです。

「私は父に願って、いつまでもあなたたちと一緒に居てくれる助け主を別に遣わしていただく。その方は真理の御霊である。その方はあなたたちと一緒に居り、あなたたちの中に居るのである。しばらくすると、世はもう私を見なくなる。しかし、あなた方は私を見る」

と言われました。確かに、キリストのみ姿は奪い去られて見えなくなる。肉眼では見えな



くなる。「けれども、あなた方は私を見る。互いに相合う」と仰った。その先へ参ります。14章25節から、

「²⁵わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。²⁶しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。²⁷わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。」

「平安」という言葉がこの14章で二回出てくる。16章では一回だけ出てきます。主の御霊が宿ってくださる、そのことを実感するときに、「平安」ということがジーンと来るんですね。

聖霊のことなんかよくわからない。誰でもそうですよ。感じることも、見ることもできません。けれども、聖霊が来てくださっているということの、絶対的証拠は「平安がある」ということです。どんな情況にあつても平安がある。もう憎しみはない、消えている。恐れも消えている。すべてが消えている。相対的なものは消えてしまった。平安がある。主さまの聖顔が輝いている。そういう思いです。

私は主に会いたいですけれども、まだ私の前に現れてくださらないですよ、残念ながら。ここで、

「再びあなたの方のもとに帰ってくる。あなた方は私を見て喜ぶ」
とか、約束されているけれども。

●葡萄の木と葡萄の枝

それから15章へ行きます。

「¹わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。²わたしにながつていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。³わたしの話した言葉によつて、あなたがたは既に清くなっている。⁴わたしにながつていなさい。わたしもあなたがたにながつている。ぶどうの枝が、木にながつていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにながつていなければ、実を結ぶことができない。」

葡萄の木と葡萄の枝、非常にわかりやすいですね。枝が木から離れれば何もできない。枝と幹が一つに結ばれているならば、自ずと実を結ぶ。非常にわかりやすいですね。

⁵わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにながつており、わたしもその人にながつていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。⁶わたしにながつ



つていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。⁷ あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。

この「望むものを何でも願いなさい。そうすれば、かなえられる」と。あとの方へ行きますと、「願いが叶えられるということ喜びが湧いてくる」ということが後で出てくる。

⁸ あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。⁹ 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。

これです。「父が私を愛してくださったように、私もあなたたちを愛してきた。この愛の中にとどまっていなさい」と。とどまっておればいいんですよ。「立派なことをしよう」とか、何かそういう野心を持ったらダメです。ただ愛の中にとどまっている。「ただあなたの御意だけです」と。イエスさまがそうですもの。「ただあなたの御意だけです」と言って祈られた。そうすると、いろんな不思議な業が出てきた。素晴らしい御言が流れてきた。

「それは私のものではない。父が私の中でなさっているわざである」

と仰っています。私たちも同じではありませんか。この方から離れたら何もできない無力者でしょ。皆さん、本当に自覚しておられますか。私は本当に自覚している、私は何もできない。学問的な意味でも、どんな時でも、「私はいつもゼロです」と思っています。

昨日も、講演を頼まれたけれども、「何をしゃべるのか？ 気のきいたことは何もないな」と思っていた。自分はゼロですから、「主よ、本当に語るべきことをあなたが教えてくださいなませ」と、そんな思いで原稿を作った。二日半で。それでぶつ倒れたんですけれども。常に自分は何もできない。

「イエスさま、あなたに密着し、あなたに包まれ、つかまれ、貫かれ、満たされていないと、私は何もできません。あなたが私から姿を消されたら、私はもぬけのからです」

と。本当に皆さん、そこに徹してくださいね。自分を何ものかだなんて思う必要はない。何もない、それでいいんだよと。そういうところに徹してくださいれば、素晴らしいことが展開すると思います。

「⁹ 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。¹⁰ わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまってい

ることになる。」

「父が私を愛したように、私もあなたたちを愛してきた。私の愛に留まりなさい。私が父の掟を守ってその愛に留まっているように、あなたたちも私の掟を守るな



らば、私の愛に留まっているはずだ」

と。「掟を守る、御意を守る」ということが「愛の中にいる」ということ。「掟、掟」と言いますと、何か恐くなりますけれども、「愛し合いなさい」というのが唯一の掟なんです。

「互いに愛し合いなさい」

「では、どうやったら愛せますか？」

「私がお前の中に宿れば、自ずと愛せるようになる。私が抜ければ、愛なんて出てこない」

と。キリスト「愛、御霊」愛です。このお方がいらつしやれば、我々は愛の存在であり得るし、愛のわざもまた展開する。このお方が抜けてしまえば、何もできない。非常に簡単ですから。

「¹¹これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。」

これも驚きですね、これから十字架にかかろうとなさっている、これから酷い目にあわされようとなさっている方が、「私の喜びがあなたの方に満ちるように」と仰っている。

「わたしの喜びがあなたたちの中にあり、あなたたちの心が喜びが満たされるためである」

と。「ためである」というのはその目的ですね。その目的のために私はこんなことを語っているんだよと。

¹²わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。¹³友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。¹⁴わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。¹⁵もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。¹⁶あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。

「あなたがたが私の名によって父に願うことは何でも叶えられる」

と。このように私どもを選んでくださった。我々が選んだのではない。主が選んでくださった。

¹⁷互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

と、ここまでは祝福ですね。ここから先が16章へ続いていきます。

「憎まれるぞ。迫害を受けるぞ」と言う。



¹⁸「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。¹⁹あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。²⁰『僕は主人にまさはりはない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。²¹しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。²²わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。²³わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。²⁴だれも行つたことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。²⁵しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。」

こんなふうに、理由なく憎まれるとか、迫害されるとか、こんなに繰り返し繰り返し語られているのは、やはり心にとめておくべきですね。そしてその次、

²⁶わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者（助け主、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。²⁷あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。』（ヨハネ15・1～27）

●「十字架と聖霊」の関係

そして16章へ入ります。

「『これらのことを話したのは、あなたがたをつまずかせないためである。²人々はあなたがたを会堂から追放するだろう。しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る。³彼らがこういうことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。⁴しかし、これらのことを話したのは、その時が来たときに、わたしが語ったということをおあなたがたに思い出させるためである。』」

迫害のことがこの16章の所でまた出てきている。しかも、

「『それどころか、あなたがたを殺す者がみな自分たちは神に礼拝を行っているのだと思う時がくる』」

という。この「礼拝を行う」というのは、ドイツ語でいうと「ゴッテスデーンスト」「神



に仕える」ということです。もともと「サービス」「仕える」ということ。「礼拝」というのはなにも拝むことではなくて、「神さまにご奉仕する」というところからきている。

「イエスの弟子たちを殺すことが神さまに仕えることだ」

と信じているパウロが正にそうでしょ。ステパノが殺されるのをよしとし、そしてダマスコへ殺害の息をはずませながら突進して行つた。その時にイエスさまが現れたでしょ。だから、彼は大真面目だった。

「このイエスの教えを見逃すわけにはいかない。これが蔓延^{はびこ}れば、我々の伝統的なユダヤ教、ユダヤの宗教は全滅する。壊滅的な打撃を受ける。これを守らねばならない。そのためには異端——自分たちからみたら異端——を徹底的にやつつけないといけない」

と。そのこともここで預言されているというわけです。

「人々はあなたたちを会堂から追放するだろう」

と。「会堂から追い出す」ということは仲間外れにするということ。

「それどころか、あなたたちを殺す者がみな自分はそのことによって神さまに仕えていると思うときがくる」

と。だから、宗教は恐いんです。宗教は間違えば、何をしかすかわからない。だから、我々はいわゆる世に言う「宗教」ではなくて、本当に真理そのものであるイエス・キリスト、霊的ご人格イエス・キリスト、そのお方に帰依していく。この点を絶対に離さないでいた^いだきたい。「鯛^{いわし}の頭も信仰」とか、何だかんだと勝手に宗教を作りあげて、「これをこうやれば御利益^{ごりやく}があるんだ」とか、そんなことを言つて商売をやったり、いろんなのが蔓延^{はびこ}りますよね。そうじゃない。

「霊と真理において礼拝する」

と、サマリヤの女との対話の中でイエスが仰つた。神さまは真の礼拝者を求めている。それは霊的人格神です。「人格」というのはちゃんと理^{ことわり}が、真理が貫いているはずですよ。

「何でもかんでも信じればいい。何かやれば変化が起こる。そしたら、それを信じたらいい」

とか、それが「オウム真理教」でしょ。理系の人たちが皆そこへ入つていったという。何か異様な事が次から次に起こる。その根源的な力を信じようとか、そういうことは危ないですよ。そうではなく、正に霊的人格神です。これはイエスご自身です。このイエスが信じられたその父なる神さま。そこにイエスはご自分を献^{けん}げていらつしやる。

「父よ、あなたの御意を。御意が天に成るようにどうぞ地にも成らせてくださ
い」

と。道理が通っている。義の線が、縦の線が。それを外しますと、



『主よ、主よ』と言う者が天国に入るのではない。御意を行う者だけが天国に入る」

とキリストは言われた。木の善し悪しによって結ぶ実が何かがわかる。善い実を結ぶのは善い木であり、悪い木は悪い実を結ぶ。「木」というものは「人格」です。人格から流れてきて、それが実となる。ですから、やはり霊的人格であるイエス・キリスト、そのお方に我々は限りなく帰依していく。その方に身をゆだねていく。その方が私たちをつかまえて、私たちをキリストと同じ姿に変えていってください。それが我々の辿っている道です。

「初めからこれらのことを言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。⁵今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。⁶むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。⁷しかし、実を言う、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。」

ここに「十字架と聖霊」の関係がはつきり出てます。「私が去る」というのは、十字架を通って父の御許に行くということ。そうしますと、助け主を、聖霊を送ってください。十字架を通して父の御許にいらつしやらなければ、聖霊は、どんなに主が願われても、それは降^{くだ}ってくださらない。贖いわざを全うしなければ降らない。贖いわざは正に我々のための贖いわざです。イエス・キリストは常に聖霊に充滿されていた方ですから。イエスの中に充滿していた聖霊。しかし、私たちはその外にいた。蚊帳の外でした。その私たちを、「父と御子」の関係と同じ関係に、今度は「父と御子と私たち」という一本線につないでくださる。そのためにどうしてもこれ(十字架)が必要だったわけです。

「私が去らなければ、助け主はあなたがたのもとに来ない。しかし、私が去れば、私は助け主をあなたがたのもとに遣わす」

と。正直、イエスさまとお別れする。もう御姿が見えなくなる。十字架がどんな苦しみかということ、弟子たちにはわかっていないと思う。けれどもとにかく、イエスとはこれでお別れだ。これが最後だと、弟子たちは悲しみにうちひしがれているわけです。しかしながら、

「はつきり言うと、私が去るのはあなたがたにとってプラスになる。私が去らなければ、助け主はあなたがたのもとに来ない。しかし、去れば、必ず助け主を遣わす」

と。この御言が成就しました。その聖霊がいらつしやいますと、「義とは何ぞや。義とは何ぞや。審判とは何ぞや」ということをはつきりお示しになる。



「⁸その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。⁹罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、」

「罪」とは何ぞや。神さまがお遣わしになる方を拒否すること、拒絶していることが罪だと。この「信ずる」というのも、「何か信じ難いものを無理に信ずる」ということではない。折角、神さまがお遣わしになった、「このキリストを受けとれ」と言ってプレゼントを差し出しておられるのに、「要りません!」と言っている。これが罪だと。「要りません」という傲慢、これが罪だと。「あなたは何様なんだ!」というわけですね、神さまから言えば。

「このまま放っておいたら死んでしまうよ、罪の中で滅んでしまう、闇の中で生命はないよ」

と。それを生命として光として神さまが贈られた、そのお方を傲慢にも拒否している。審いていくわけです。そうでしょ、十字架につけて。ピラトは一生懸命に赦そうとした。彼らは「放っておけば暴動になりますよ。ピラトさん、あなたの地位が危なくなりますよ」というわけです。ピラトもからだを張ってほしかったけれども、私から言えば。けれども、彼は妥協してしまった。

それから、「義」とは何か。

「¹⁰義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、」

これが義だという。これも禅問答みたいです。「私が父のもとに行き、あなたがたは最早私を見ない」、つまりご復活ですよ。復活して父の御許へいらつしやる。これが義だと言う。これはローマ書の4章の一番お終いの所に出てきます。もちろん、パウロはこのヨハネ伝のことを考えて書いているわけではありません。けれども、まさしくパウロはローマ書4章の終りの所に、

「アブラハムが神を信じた、そのように信仰によって義とされる」

ということを繰り返している箇所です。その24節、

「²⁴……わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。²⁵イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」

「イエスは私たちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられたのです」

と。これがさっきのヨハネの16章で言いますと、

「義についてとは、私が父の御許に行き、あなたたちはもう私を見ないからである」

と。父の御許にストレートに行かれたのではなかった。十字架を負って、これで陰府に下り、そこから聖霊の力で、あるいは神さまの力で、あの永遠の生命体となって甦れた、霊体と



なつて顕れた。そして天に昇つて行かれた。この一連のことです。これが「義」なんです。私たちの罪はすっかり取り払われて、私たちが赦されたという証拠は、父の御許にのぼられた、そのことによって証明される。贖いわざが終わらなければ、父の御許においでにならないわけです。

だから、「十字架・復活・昇天」、これが私たちにとって神さまとの関係を真つ直ぐに立てている。「義」というのはそういうことです。神さまとの関係が真つ直ぐに立っている。今までの不義ということは、立っていなかった。罪のゆえに立っていなかった。それが、罪が取り払われ、そして永遠の生命がキリストの中にあのようなお姿で顕れて、そして天に昇ってくださった。それでもうお前たちもすっかり古い罪が取り払われた。その宣言が、ご復活によつてここに明らかにされた。そして今度は、助け主となつて、我々の中に降つて来てくださるわけです。そういう内容がここに示されていると思います。

「裁き」というのはサタンが裁かれる。人間を惑わし続けてきたサタン。

「父よ、彼らを赦したまえ。その為していることがわからないからです」

と。これはサタンに操られて、神の子イエスを十字架につけ、殺してしまったということですから。その親玉であるところのサタンが碎かれる、この世の頭が裁かれる。

「また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。」

¹²言つておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。¹³しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。

「真理」という言葉は、「真理とは何ですか？」と、わからないです。聖霊がすべてのことを我々にお示しくださる。真理のあらゆる面を悟らせてくださる。

その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。¹⁴その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。

天上にのぼられたイエスさま、そのお方のいわば分身、あるいは代表者といひましようか、身代わりとして聖霊という姿で今度は一人ひとりの中に宿つてくださる。

¹⁵父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。

¹⁶「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」¹⁷そこで、弟子たちのある者は互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言つておられるのは、何のことだろう。¹⁸また、言った。『しばらくすると』と言つておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」



19 イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。20 はつきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。21 女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。22 ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。23 その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はつきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。24 今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

この終りのところですよ。

「求めなさい。そうすれば願いはかなえられて、あなたたちの心は喜びで満たされる」

と。これをしっかり受けとっておいてください。私はイエスさまを見たことはない。私の中にいてくださるかどうかもわからない。でも、何だか「常に守られている」という思いがあるんですよ。常に守られている。……

それから、産みの苦しみのことがあります。

「あなたたちは悲しむが、世は喜ぶ。しかし、あなたたちの悲しみは喜びに変わる」

と仰っています。ここを文語のほうで見ますと、

「20 誠にまことに汝らに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂うべし、然れどその憂は喜^{うれ}悦^{よろこ}とならん。21 おんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生れたる喜悦によりてなり。22 斯く汝らも今は憂あり、されど我ふたたび汝らを見ん、その時なんじらの心よろこぶべし、その喜悦を奪う者なし。」

まずここで主が出会ってください。そのときに私たちに喜びが訪れるということが一つ言われています。それから、願いがきかれるときの喜びと、二つ言われている。最初の喜びというのは——今イエスさまとのお別れで悲しんでいる。しかし——「私は絶対にあなたとまた会おうよ」と。実際に復活されたキリストが顕れられたですね、弟子たちの中に。本当にその時に弟子たちは喜んだということが出てきますよね、復活のところまで。



「その時あなたたちの心は喜び、その喜びは取り去られることはない」と。そしてプラス、

「あなたが父に求めるものは何でも、父は私の名によって与えてくださるであろう。」

と。イエスさまは「自分の名で祈れ」とも仰ってくださいました。

「主イエスさま、あなたの聖名によって祈ります。どうぞ、これを聴いてください」と。これも仰った。それから今度は、「父に祈れ」と。

「イエス・キリストの聖名によって、父なる神さま、お願いいたします。どうぞこうしてください」

と、それもやれと。両方言ってくださいました。排斥し合うことはない。「私の名によって父に祈れ」ということは、

「私の名前を使うならば、私の名前に免じて、私の名前が廃らないようにちゃんと祈りを聴いてください」

と。「これが見えないか!？」（テレビドラマ「水戸黄門」での台詞^{せりふ}）という、そういう感じですね。

「イエス・キリストの名前です。この名前で祈っているんですよ、お父さん！ わかったでしょうね！」

と言って、こういうように、「キリストの聖名を使いなさい」と。

「あつ、この名前を持ち出されたら、わしは弱いよ」

と、天のお父さまは。まあそういう感覚で、皆さん、受けとってくださいね。「聖名によってというのは単なる付け足しではない。「イエス・キリストの聖名」これは本当に凄いんです。

「キリストの聖名を持ち出して祈りなさい、そうすれば全部聴いてあげる」

と。楽しいではありませんか、そういう関係は。

「ああ、キリストの名を持ち出しておねだりしてきたな、これはどうも聴かんわけにいかんわな」

と（笑）。それが父なる神さまの御意だという。そして、

「願いが叶えられたら、あなたたちの心は喜びで満たされるよ」

と。「願いが聴かれることがうれしい」というよりも、それを通して「ああ、繋がっているんだ」という、その喜びなんです。「父・御意・私たち」これが一本につながっている。この喜びです。ありがたいのは、「いつも主と共にある」という事実、その現実なんです。これは見えないものですから、何か証拠が欲しいわけです。

「ああ、この願いがきかれた。やはり私は愛されているんだ。私のことを思っていてくださっているんだ」

と、そういう証拠ですね。「その証拠をください」なんて言わなくて、一生懸命に祈っていたら、いつしかいろんなことが聴かれている。「ああ、ありがたや、ありがたや」という、



そういう感じです。それで過ごしてください。

●我すでに世に勝てり

その次へまいります。

「²⁵「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。²⁶その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。」

ここでまた出てきました、「わたしの名によって、キリストの聖名によって」父に求める。

わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。²⁷父御自身が、

あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わた

しが神のもとから出て来たことを信じたからである。²⁸わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」²⁹弟子たちは言った。

「今は、はつきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。³⁰あなたが

何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。

これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」

³¹イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。³²だが、

あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、

共にいてくださるからだ。³³これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、

勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

この最後のところですね。これはいろいろ聖書によって訳が違いますが、文語の

ほうを見ますと、

「なんじら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」

私たちはこの娑婆で生活しているかぎり、いろんな苦難、患難が伴う。「迫害」というのは、

宗教的な理由で迫害される、憎まれるということです。私たちは今の日本の社会ではそんなに宗教的迫害ということは、ありがたいことにありません。けれども、住みにくい世で

あることはちつとも変わらない。政権が変わろうが何しようが、相変わらず住み難い世であることは変わりありません。あちらこちらで天変地異が起こっていますし、本当に住

み難い世ですね。

聖書では、「終りのときにはいろんな苦難が訪れる」ということがちゃんと預言されている。

ですから、そういう意味で、この世にあるかぎりには、我々にはいろんな苦難が訪れてくる。

「しかし、勇気を出しなさい、雄々しくありなさい、私は既に勝った。だから、

あなた方も勝てる」



と言う。イエスさまの一人勝ちではないんですよ。

「お前たちも勝つんだ。私がついているから、大丈夫だよ」

と、この保証がある。だから、あたふたと周りを見るのではなくて、いつも主を見ている。この地上におるかぎり、波のようですね、時には小波、大波、大津波、いろんなことに我々は襲われます。いい日ばかりではありません。しかしながら、あなたはここでこんなふうに我々を励ましてくださっています。最後のお言葉ですよ。14章からが祈りでしょ。だから、一番最後のお言葉が、

「私はあなた方に平安を与える。あなた方は世ではいろんな悩み、苦しみがある。しかし、勇気を出さない。私は既に世に勝ったから」

と。次の17章に出てきますが、我々は世に宿を持っていながら、世のものではないという、こういう矛盾構造なんですよ。世にとつぷり浸れば、世の論理で生きていけばそれでいいんです。その終りは地獄ですけども（笑）。世の論理で乗っかっていけば、それなりにうまく世渡りができます。しかし、クリスチャンというのは、もつとも惨めな面は、世に生きながら世のものではないという。世のものでない人間が世の中に生きていかなければならない。この矛盾なんですね。

だから、クリスチャンは常に「ラクチン、ラクチン」なんて思う必要は全くない。「そうじゃない」と、はつきり主は仰っている。しかも、主はあのお苦しみを味わってください。あの主の苦しみにまさる苦しみなんて、どこを捜しても出てこない。あんなに善いお方がなぜあんな酷い目にあわなければならないのか。重い十字架を背負わされて、あのゴルゴタへの路を登って行く。そして、十字架にガンガンガンと、五寸釘を打ちつけられて、そしてぶら下げられて、あんな酷い目にどうして？ というふうに思います。そういう主がお苦しみにあわれたということを我々がしっかりと受けとりますと、しかもそれは、

「あなた方一人ひとりに生命を与えるためだった」

と仰ってください。その主のご生涯に比べれば、我々がこの地上でどんな目にあいまして、キリストの苦しみにまさるものはない。

私は今、キリストの肉体的な苦しみを主として申しました。酷い目にあつたと。本当のキリストの苦しみは

「なんで、我を棄て給いし」

という、あれです。あれだけ本当に一つであつたものが、

「なぜ、私をあなたはお棄てになつたんですか」

という、あの言葉に表れている苦しみです。愛が引き裂かれた。愛が踏みにじられた。永遠の愛が引き裂かれた。これはイエスさまにしかわからない苦しみです。それをも貫いて、

「彼らを赦してやってください。……父よ、わが霊を聖手にゆだねます」

と。次の十字架の所へ来てしまいますけれども。



そういうことですので、クリスチャンというのは、ある面では非常に損な生き方をさせられるかも知れません。悪いことはできませんから。人が「まあ、まあ」と言っても、こっちは赦せない、自分が赦せないですから。どんな時でも清く正しく美しく生きていかなければならないわけですね、健気^{けなげ}にも。そうでしょ。誰もかまってくれないですよ、「あいつはバカだよ」なんて言われて。ところがどっこい、主は絶対見棄てたまわない。

「お前と一緒にいるよ。常にお前と一緒にいる。大丈夫だよ」

と。その保証があるから、我々はがんばれる。そんな保証もなくて、「人間力でそれをやれ。それが信仰だ」なんて言われたら、私はそんなのはとても御免こうむります。それは「信仰」だとか、「信仰の力」だとか、そんなことは一切必要ない。キリストの愛の力です。

「わが愛に居れ」

「はい」

「私はお前を護っている」

「はい」

と。全部、主さまが主役です。主さまというこの主役に身をゆだねておれば、私たちはどこへ行きましても主と一緒に歩いている。そういうことです。

●永遠の生命

次の17章へまいります。

「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。²あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。³永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」

こここのところの、「永遠の生命」とは何ぞやと。

「永遠の生命とは唯一のまことの神であられるあなたと、そしてそのあなたが お遣わしくださったこのイエス、これを知る。これが永遠の生命だ」

と。さつき「霊的人格神」と申しました。永遠の生命とは、イエス・キリストというお方の中にとつぷりと自分をゆだねてしまう。私は「帰依」という言葉が好きなんです。帰依^{きい}りたのむという、そこへ入る。小池先生は「帰入」という言葉がお好きでしたね、「帰入」（帰入）とか、「祈り入る」（祈入）とか。

とにかく、「入る」んです。皆さん、お風呂に入るでしょ。お湯の中に入るでしょ。シャワーもいいけれども、やはりお湯の中に全身を浸して、そのお湯によってからだ全体が温められて、何か幸せな気分になってきますね。その時に私は祈るんです、お風呂の中で。



「幸せでございます。あなたといつも人であらしてください」

と。そういうふうにして、このイエス・キリストという方を知る。そのことが同時に父なる神さまを知ることです。父なる神さまとイエス・キリストとを別々に分離して、

「はい、お父さん、知りましたよ。はい、イエスさま、あなたも知りましたよ」

と、そういうふうな分離構造ではなくて、

「私を見た者は父を見た」

「私を信じる者は、私をお遣わしになった父を信じているのである」

と。だから、小池先生が言われたように、

「イエス・キリストは神さまの出店だ」

と。神さまの出店なんだから、この出店へ来れば、そこで神さまに会えるんだと。キリストの中に神さまが宿っておられる。イエス・キリストをいただければ、一挙両得、両方をもらうてしまうことになる。だから、ありがたいでしょ。我々に

「神を信じろ」

と言われても、

「ああ、神さまね。ああ、信じてみましょう、それはでかいでしょうね」

なんて（笑）、そんなのでは全然だめです。やはり、イエス・キリスト、あの霊的な人格として、慈しみ深くて本当に愛そのものでありたもう、そのイエス・キリストに直々に出会^{じかじか}う

ということ。「弟子たちは幸せなやつだな」と思いますね。直かに一緒に居ったんですから。私たちはそこに居ませんでしたけれども。さっきの図のように、ここへ入れていただくわけですからね。しかも、弟子はこの図の中には居たけれども、心は外だったんです。だから、イエスを棄ててしまった。

「命を棄ててもあなたに従います」

と言ったペテロが三度「知らん」と言ったわけですよ。外側的に中に居ると思込んでいても、実はいなかったんです。弟子たちも私たちもみな本質的には外にいたんですね。本当に中に入れていただけるのは、十字架と聖霊です。このお方をいただいて初めて、この中にこれたわけです。弟子たちも私たちも同じなんです。うらやむことはなにもない。

³ 永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。⁴ わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。

⁵ 父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

それから今度は、弟子たちのためにまず祈られます。それから、この弟子たちを通して信者となった者たちのために祈られる。

⁶ 世から選り出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現し



ました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。⁷わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。⁸なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。⁹彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのものだからです。¹⁰わたしのものはすべてあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。

弟子たちを通して私は栄光を既に受けていますと。

¹¹わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。

今までは、イエスご自身が弟子たちを守ってきただけでした。今度、弟子たちをこの世に残してイエスは父のみもとに帰ろうとなさっている。彼らはとり残されるわけです。だから、「どうぞ、聖名によって彼らを守ってください。あなたの名において彼らを守ってください。神さま、あなたご自身の聖名のゆえに、聖名によって、聖名の中で彼らを守ってやってください」と。それは、

わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。

これが大事です。一つとなる。分裂があつてはいけません。父と御子キリストが全く一つであるように、今度は彼らが一つである。何十人おろうと、何百人おろうと、それが本当に一つ、一体となるためですと。

¹²わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。¹³しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。¹⁴わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。¹⁵わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださいることです。¹⁶わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。¹⁷真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。¹⁸わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。¹⁹彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となる



ためです。」（ヨハネ17：1～19）

この今読みました終りの所は、本当に弟子たちを思われるイエスの御思いが煮詰まっている思いがいたします。

「¹³……今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。¹⁴わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。」

これは先程申しました。イエスはなぜ憎まれたか。世のものではなかったから。世から飛び出た方だったから。世に染まらない方だから。だから、相反するわけですね、この世の原理と。自己愛とか、自己追求というこの世の原理。己のためにすべてを求める、奪い取ろうとする、そういった肉体的な原理とあい反する。イエス・キリストは神さまにすべてをゆだね、すべてを与え、人々に与える愛。

「己を愛する者はそれを失い、わがため福音のため己を憎む者は永遠の生命を得る」

という。「己を憎む」ということは、己の執着を棄てるという、「自己執着を棄てる」ということです。つまり、「世の者ではない」という姿に徹していくことです。イエスがこの世の者でないように、もはや私たちはこの世の者ではないんです。「ああ、残念だ」と、皆さん、思われますか？「この世の者でありたかった。この世に執着があるんです」と。そうじゃない。世から選んだんです。

「あなた方が私を選んだのではない。私があなた方を選んだ」

「ご迷惑でした」なんて言ったらだめですよ、「ありがとうございます」と言わないと。

「あなた方を選んだ。そして立てた。弟子として鍛えた。それは行つて実を結び、その実が残るため。それによつて父が栄光をお受けになるためである」

と、凄いい使命をいただいた。我々は地上に、ただノホホンと百歳まで生きるために地上に置かれていたのではない。神さまのみよくだいご名代として、神さまの御意を実現するために遣わされた者として我々は今、世にあるんです。

キリストが「遣わされた者」といつも仰っています。その遣わされた者が、お遣わしくださいましたその主、ご主人の御意を行う、これが唯一の使命でしょ、存在理由でしょ。それに徹していかれた。今度は、そのお方が私たち一人ひとりを選んで、キリストの代りをさせられる。ただキリストは十字架という、これをなさった。これは誰もできない。これはイエス・キリストだけがなしてくださった。そうすると今度は、聖霊をいただいた神の子として、私たちは聖霊の器として、本当に神さまの御意、キリストがなしてくださった御意を私たちはその続きをやつていく。バトンを受けて続きを一人ひとりが小さなキリストとして胸を張つてやつていく。



「なに胸を張っているんだよ？」

「キリストだよ、キリストだよ、見えないかね？ 見えないのは当たり前ではないか。見えてたまるかい」

なんてね（笑）。

「あのなんだか日頃ウジウジしていた、うつむいていた奴がこの頃、妙に胸を張っているな」

と言われるくらいに、皆さん、胸を張って生きてくださいね。それはキリストの聖名のゆえなんです。自分のゆえに胸を張るのではない。キリストという聖名が背番号のようにゼッケンが付いているんですよ。そうしたら、押し出されざるを得ないではありませんか。それはキリストがなさってください。徹底的に「自分ではない」ということを自覚なさったら、今度は誰もいばれないですよ。素晴らしいことが起こったら、

「ああやはり、主さまは素晴らしいです。ありがとうございます」

と、それでいいではないですか。なにか嬉しくなってきましたね。

「そういう生活をさせてあげるよ。そうすれば、あなた方はこの世の者ではなくて、この世になじまなくても大丈夫。いろんな迫害を受けるかもしれない。患難がいろいろあるかもしれない。大丈夫だ。私がいつもお前と一緒に闘うから」と。

「汝ら雄々しかれ。われ既に世に勝てり。アバヨ！」

なんてでは困りますが、「アバヨ」ではない。

「帰ってくるよ。お前たちと世の終りまで一緒にいる。だから、もう独りではないからね」

と言つて、我々を励ましてくださる。これが聖霊さまです。だから、「助け主」でしょ。「真理の御霊」でしょ。あらゆる不真理のあらゆる面を、あるいは、あらゆる真理をあなた方に悟らせるという。ヨハネの手紙をご覧ください。

「人に教えてもらう必要は全くない。この聖霊という油があなた方にすべて必

要なことを教えるから。その方にゆだねなさい」

と、ヨハネ第一の手紙に書いてある。だから、このヨハネ福音書とヨハネ第一の手紙はセツトしてお受けとりいただきたい。そうすると、

「なんとありがたい世界に我々はいれられたんだろうか、こんなむしのいい話があるっていいんだろか、騙だまされているのではなからうか？」

と思うくらいにヨハネ福音書は素晴らしいんですよ。なんせ、お返しを何も求めておられない。「こうしたら、こうしてやる」なんていう世界ではない。

「戒めを守れ」

「どんな戒めですか」



「愛し合いなさいという戒め。私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。それは父が私を愛してくださった。だから、あなた方を愛せた。今度は、私にこれほど愛されたんだろ。そうしたら、同じ愛で愛し合いなさい。」

と。その「同じ愛で」という愛は、聖霊の愛です。聖霊が宿られるから出てくる愛なんです。自分から出てこない。そうしたら、気が楽ではありませんか。

「あんた、それでもクリスチャン？」

なんて、ご主人から言われたら、

「ああ、今日はちよつと聖霊はお休みなんや。そのうちにまた聖霊が来てくださるから、そしたら、憎々しいあなただつて、私を愛するのよ」

なんて（笑）、そのくらいの気持ちで。つまり、自分から出ませんということ。そう言って開き直りましょう。

「お前、今日、ふさぎこんでいるね」

「はい、聖霊がお休みです」

「今日は意外にうれしそうではないか」

「はい、聖霊が来てくださっています」

なんて、何でも聖霊のせいにする。そういう明るいうれしそうなクリスチャンでいてほしいというのが、主さまの願いですよ。私も願ってますよ、皆さんに対してね。でも、それは主さまが皆さんお一人お一人に、

「わが飲びの満たされんために」

と仰ってくださいたでしょ。「私の飲びが湧きあふれるように」と、そのようにずうつと語ってきてくださった。それを素直に「はいっ」と受けとることです。

「¹⁵わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。¹⁶わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。¹⁷真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。¹⁸わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。¹⁹彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。」

ここまでが弟子たちのための祈り。今度は、信者のための祈りです。

²⁰また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。²¹父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。²²あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも



一つになるためです。²³わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。²⁴父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。²⁵正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。²⁶わたしは御名を彼らに知らせました。また、これから知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです。」（ヨハネ17・15～26）

このように、まず弟子になった者、それから弟子たちを通して信者になった者というように二段構えになっておりますけれども、このお祈りの中味を見ますと、ちつとも変わらない。もうこの境は取っ払われてしまっている。しかも、この外へどんどん溢れ出ようとしている。

●一人の羊飼、一つの群れ

これはヨハネ伝10章をごらんください。あの「善き羊飼」のお話で出てきます。7節から見ます。

「⁷イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。⁸わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。⁹わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。¹⁰盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。¹¹わたしは良い羊飼である。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。¹²羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——¹³彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。¹⁴わたしは良い羊飼である。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。¹⁵それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。」

ここまで、この羊は囲いの中にいる羊です。信者であろうと、弟子であろうと、また弟子を通して御言を、イエスを信じた者であろうと、要するに今、信じてこの囲いの中にいる。イエスに守られている者たちです。ところがその先です。



16 わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。17 わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。18 だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」（ヨハネ10：7～18）

囲いの中は守られている。囲いの外には狼がいて、羊が囲いの外に出ると、食い荒らされてしまう。もし、狼が乗り越えて入ってきたとしても、羊飼いは命懸けで羊を守る。羊飼いは羊のためなら命も捨てる。こういうことが言われていました。こういう固い守りの囲いが外されて、囲いの外にいる者たちも導かなければならない。この囲いがどんどん広く大きくなっていつて、限界がなくなるくらいに広がっていく。これが一番願っておられることです。ついに一人の羊飼い、一つの群れに、に粹すらも取っ払わられて、ただ一人のイエス・キリストという牧者、そして神の子たちという世界が成就する。それが今なんです。私たちは、中心はおろか、そのはるか彼方にいた。時代的にも二千年後でありますし、距離的にもうんと離れています。救いに与るなんて絶望もはなだしい理想です、理屈で言いますならば。その我々がなんとどまん中にいるんですね。ということは、一人ひとりがまん真ん中にいるわけです。これが恵みなんです。

早いも遅いもない。東洋も西洋もない。地球は一つです。太陽は一つです。真の太陽でありたもうキリスト、太陽のごときキリスト、そのお方がすべてものを照らしてください。ヨハネ伝1章にありますように、真の光が地を照らしている。なんの差別もない。その名を信じた者は血脈でもなければ、人の願いでもなく、人のわざでもなく、ただ神によつて生まれた。神の思し召し^{おぼ}によつて、御意によつて、父なる神の御意によつて生まれる。そういう世界がヨハネ伝です。そして、こんなに愛に満ちた豊かな世界なんです。だから、私はヨハネ伝から離れられないという所以^{ゆえん}です。

よく、夜空を見ました時に、お月さまがあつて、それが何重にもまた光輪が取り巻いていることがある——あれがあると明日はだいたい雨なんです——私たちはその一番真ん中のお月さまなんです。それが太陽の光を浴びて輝く。まあ比喩的にいえばそういうことです。要は、ヨハネ福音書においては、本当にこのキリストの愛、あるいはキリストにおいて表れた父の愛、神の愛の圧倒的な愛の力がヨハネ福音書を貫いている。それに打たれば、みんな痺^{しび}れてしまう。この福音書のイエス・キリストさまが、

「わが言葉は霊なり生命なり」

と言われた。いわゆる肉なるもの、生まれながらに抱きかかえてきたものは、あるところまでは行くけれども、そこから先へは行かない。新しいものが上から下ってくる。そして、



根をおろし芽を出し生長して豊かな実を結んでいく。これが本体であって、我々の肉、第一次の命というものはそれを生み出す土壌にすぎない。そして役割が終わったら、それは枯れて消えて行く。そして本ものだけが残る。

イエスさまも地上にあのように肉の姿で現れてくださった。そして役割を終えたら、天上へ帰って行かれました。

「あなた方はもう私を見なくなる。あなた方は泣き悲しむ。しかし、その悲し

みは喜びに変わる」

と言われた。そして事実、福音の主は弟子たちの中に顕れてくださった。私たちは復活の主を直接見ませんけれども、しかし今度は、聖霊というお姿で一人ひとりの中に宿ってくださる。もうくつついて離れない。中に宿って離れないと、そう約束してくださっている。そういうお約束なんです。

私たちは「別れ」というのは辛いんです。私は時々、翔君のことを申しますけれども、本当に辛い。けれども、主さまが

「自分が去ることは、あなた方には益になる。私が去らなければ、助け主、聖霊は来ない。永遠の生命はあなた方の中に宿らない。あなた方は永遠の生命者にはなれない。私が逝って初めて、あなた方は生きるようになる。私が生きるので、あなた方も生きる。常に一緒、一体だよ。この一体、一如は私が去って初めて成就する」

ということを仰った。

翔君とイエスさまは全く別ですよ。別ですけども、私のまあ慰めといえば、あのようにして地上での役割を果たした。苦しい身を味わいながら、それを果たした。そして去って行った。今度は素晴らしい栄光の体となって顕れてほしいというのが私の願いなんです。まあ向こうから顕れてくれるか、私が向こうへ行つて会うのか、どっちが先かわかりませんけれども。

そういう、この地上で終りではない。私たちの生涯は絶対に地上で終りではない。地上は本当に準備なんです。本ものの世界が無量無量に展開するための準備期間を私たちは地上で百年そこそこ過ごさせていただくわけです。イエスさまは33年ですよ、わずか。結婚もなさらなかったんですよ、お気の毒にも——「お気の毒にも」と言おうか、何と言おうか——。よく、ご老人が、

「わしは長生きしすぎた。もつと早く向こうへ呼んでもらったほうが良かったよ」

なんて仰る。寂しい告白でしょ。そうじゃなくて、この地上の命は確かにいろんなものが不自由になっていく。衰えていく。衰えるのと逆比例して、本ものが素晴らしく育っている、生長している。

「私は変貌しつつあるんだ」



と。このように、皆さん、言つてほしい。私は言いたいです、私も肉体的には衰えていく。しかし、私という人格、霊的人格は、イエス・キリストというお方の生命が宿つてからは、ぐんぐん変わつてきて変貌してきていると。しかも、その変貌している私というものが、この世のいろんな業においてもどこかで表れてきているような気がする。

たとえば、昨日、そういうシンポジウムに呼ばれた。メインの役割をしてほしいと言う。こっちから頼んでもいないのに、向こうが引つ張りだす。いろんな所に私は引つ張り出される。それは主の御用と思つてやっています。これは主さまが託された仕事だと思つて、私は全力をそれに献げます。「この世の仕事だからいい加減に、集会は大事に」なんてことは無い。私にとっては、集会であろうと、この世で託されたいろんなお仕事であろうと、みな「主に仕える」という点では一貫しています。それに一生懸命にやるのが主の喜び給うところである。

よく、「栄光を現すために」という言葉が出てきますね。これを目的にしたらだめですよ。

「栄光を現すために、どうぞ私をこうしてください」

とか、そうすると、そこには非常にある種のぎこちなさが、不自然さが出てきてしまうと思う。そうでなくて、私たちはひたすら主の御力をいただき、主の御霊を慕い、そして

「主よ、どうぞ、私の中で御業をなさってください」

と祈つて、それに委ねて、淡々と粛々^{しゆく}とやる。その結果——結果というのはいもう自分のものではない——結果というののは、結ぶ果^みでしょ。結ぶ果は、どんな果でありましょうとも、それは主さまに捧げたものです。人が誉めてくれようが、貶^{けな}そうが、それは関係ない。私たちは無責任です。私たちがやるべきことは、

「常に、主さま、あなたが私の中で働いてください。あなたの御意が私の中で成つてください。主さま、あなたの弟子らしく在らせてください。常に主さまと私が一つでありますように」

と、それ一つを願つていく。本体を願つていけば、そこから果はおこぼれとして流れてくる。その流れてくる果に囚われますと、変なことになりますから。自分たちはひたすら「主さまと一つで在らせてください」と。キリストが祈つておられるように、「一つで在らせてください」という、その祈りで日々の生活をいたしますと、風邪を引こうが何が起ころうが——人間ですからいろんなことがありますよ——でも、その中でも

「ちゃんと為^なすべきことを為させてください。また自分の弱さも知らせてください」

と祈る。あまり聖霊の人が強すぎたら、これは危ないと思います。

「聖霊が来ていますから、何でもできますよ！」

なんてやったら、それは危ない。聖霊は先生を通して物凄いことをなさった。それは事実です。しかし、それは御業であつて、先生の業ではない。私はそう思っている。自ずとそれが栄光となつて、神さまに還つていくだけなんです。自分たちが、「栄光をさあ差し上



げます」とか、

「こんなふうな働きをしてきました。どうぞ、先生、喜んでください。あなたの聖名によってこんなことが起こりました」

とか、弟子たちがやっていましたよね。

「まあまあ、それもいいけれども、それよりもあなたの名前が天の書に記されていることを喜びなさい」

と言われた。ということは、

「いつも神さまと一緒にいることを喜びなさい」

と言われたので、「どういう変化がありました。どんなことが起きました」とか、そんなことはどうだっていい。常に神さまと一緒にということが幸いだ。愛というのはそうではありませんか。「一緒にいることが幸せだ」というのが愛の姿だと思う。

ところが、新聞記事を見ますと、停年の夫が家でゴロゴロしていると、

「存在そのものが邪魔なんです、出て行ってください」

と、新聞に投書がある。

「私は存在そのものが邪魔だと言われています。どうしたらよろしいか？」

と（笑）。回答は、

「あなたのこれまでを反省してください。そこまで言われるには、あなたのほうにそれほど何かがあつたはずですよ。あなたはそれに気づきもなさっていない。それが

根本原因です」

という身の上相談がありますよね。「存在そのものが嫌なんです」と、これは悲しいよな。愛し合つて結婚したはずなのに、と私なんかは思つてしまうんです。まあ、皆さんは、

「そばにいてくれるだけで、うれしいんだよ」

と、そう言わせるような光輝く存在であられるはずですよ、お互いさま。もしそうでなかったら、「そうしてください」とお祈りになつたらいい。

「まだうちのダンナは私の存在を何かこう……、『いてくれよ、お前がいてくれな

い』とどうにもならん」とか言わせてください」

とか、主さまに祈るんです。

まあいろいろ冗談ぽくも申しましたが、やはり、ヨハネ福音書というのはこのように、主さまが我々をどんなに愛して、あの主の中に宿っている永遠の生命、それは愛であり、喜びであり、実に豊かな世界である。光である。

「そういう豊かな世界の中に、あなた方はいらつしやい、いらつしやい」

と招いていらつしやる。そういう世界でありますので、しかも、条件は何も付いてません。実に豊かな世界に我々は招かれているということです。



● 祈り

それではお祈りいたします。

主さま、ありがとうございます。今日もこうして、新宿の皆さん方と、あなたの生命の御言、喜びに満ちあふれたあなたの生命そのものなる御言と一緒に味わうことができました。僕もこうして皆さんと味わっているうちに、喜びがこみあげて、本当に笑ってしまいました。主さま、サラも笑いました。本当に人は嬉しい時に笑います。どうぞ、ここに集われた一人ひとりの日々のご生活が喜びと笑いに包まれた日々でありますように。どんなに悲しいことや辛いことや、乗り越えなければならぬ様々な問題が波のように押し寄せてきましようとも、あなたは仰つてくださいました、

「汝ら、世に在りては悩みあり。されど雄々しかれ、われ世に勝てり」

と。主さま、あなたが贖い業を終えて天上に昇られ、そして父の御許からご自身が聖霊という姿で、私ども一人ひとりの中に宿つてくださるという恵み、あなたの一方的なご愛であり、み恵みでございます。

どうか、そのことを確^{しか}と受けとり、日々を主さまへの讃美と感謝で過ごさせてください。あなたの愛を深く知れば知るほど、私たちは愛の人と変えられていきます。あなたとの結びつきが強ければ強いほど、あなたの御思いは私たちの中に成就していきます。どうぞ、あなたの中に居らせてください。あなたのご愛の中にとどませてください。そして、あなたの御意が私たちを通して兄弟姉妹の中に、また家庭の中に、そしてこの国の人たちの中に広がっていきますように。

「この囲いの中にいない者たちをも導かなければならない。ついに一人の羊飼
い、一つの群れとなるんだ」

と仰った。そのあなたのご本願がどうぞ、我々を通して少しずつでも前進して行きますように、私たちを導いてください。

今日、お見えにならなかった方の上にも、どうぞあなたのみ恵みが等しくありますように。もし、病にふせておられるならば、どうぞ、あなたが生命の力をお与えください。各地にあります兄弟姉妹をもどうぞ祝福してください。

今日は京都では、2月のこのヨハネ福音書の講演を聴いております。京都と東京は一つです。主さま、いよいよ各地の兄弟姉妹とも本当に一つ思いで、我々に託された使命を果していくことができますようにお導きください。

主イエス・キリストの尊き聖名によつてこの祈りを御前にお捧げいたします。アーメン

